

三人の盲の話

泉鏡花作

—

「もし／＼、其處へ行らつしやりますお方。」
「……と呼ぶ。」

呼ばれた坂上は、此の聲を聞くと、外套の襟から
悚然した。……誰に似て可厭な、何時覺えの
ある可忌しい調子と云ふのではない。が、辿りかゝ
つた其のたら／＼上りの長い坂の、下から丁ど中央
と思ふ處で、靄のむら／＼と、動かない渦の中を、
見え隠れに、浮いつ沈みつする體で、靨青も聞えぬ
ばかり——四ツ谷の通りから穴の横町へ続く、
坂の上から、しよな／＼下りて来て、擦違つたと思
ふ、と其の聲。

何の約束もなく、思ひも懸けず行違つたのに、ト
見ながら行過ぎるうち、其れなり何事も無しには分
れまい。呼ぶか、留めるか、吃と口を利くに達ひな
い、と坂上は不思議にも然う思つた。尤も其は、或

機會きつかけに五位ゐさぎ鷺ぎが闇夜やみを叫さけぶ、鴉からすが鳴なく、と同じ意味いみで、聞きくものは、其處そこに自分じぶん一人ひとりでも、鳥とりは誰たれに向むかつて呼よぶのか分わからない。けれども、可厭いやな、可忌いまはしい聲こゑを聞きかすには濟すむまい、と思おもふと案あんの定ぢやう・・・

來きて、其その行逢ゆきあつたものは、一ひとならびに並ならんだ三人にんづれで、どれも悄乎しよんぼりとした輟摩あんなまである。

「中なかに挟はさまれたのは、弱々よわ／＼と、首くびの白しろい、髪かみの濃こい、中年増ちうとしまと思おもふ婦をんなで、兩りやうの肩かたがげつそり瘦やせて、襟えりに引合ひきあせた袖そでの影かげが――瘦やせた胸むねを雙さうの乳房ちゆうさまで染しみ通とほるか、と薄暗うすくらく、裾すそをかけて、帶おびの色いろと同じやうに――黒くろく映さして、ぴた／＼ぴた／＼と草履穿せうりばきか、地つちとすれ／＼の褸つまを見みた。

先さきに立たつたのは鼠ねずみであらう夜目よめには此この靄もやを織おつてなやした、被布ひふのやうなものを、ぐたりと着きて、縁ふちなしの帽子ぼうしらしい、ぬいと、のはうづに高たかい、坊ぼう主頭ずあたま其そのまゝと云いふのを被かぶつた、脊せいのひよろりとしたのが、胴どうを畝うねらして・・・通とほる。

後なる一人は、中脊の細い男で、眞中の、其の盲目の髪の影にも隠れさうに、帯に體を附着けて行違つたのであるから、形、恰好、孰れも判然としな
い中に、此の三人目のが就中臙に見えへた。

此の癖、もし／＼、と云つた、……聲を聞くと、一番あとの按摩が呼止めた事が、何うかしてか直ぐに知れた……

「私かい。」

と直ぐに答へて、坂上は其のまゝ立留まつて、振向いた……ひやりと肩から窺みながら、矢庭に吠える犬に、（畜生、）とて擬勢を示す意氣相である。

「はあ、お前様で。」

と沈んで云ふ。果せる哉、殿の瘦按摩で、恚う口をきく時、靄を漕ぐ、杖を櫂に、斜めに握つて、坂の二三歩低い處に、伸上るらしく仰向いて居た。

先の二人、頭の長いのと、何かに黒髪を結んだのは、芝居の樂屋の鬘臺に、鬘をのせて、倒に釣し風情で、前後になぞへに並んで、向うむきに立つて、同伴者の、然うして立淀んだのを待つらしい。

坂上は外套の袖を捻ぢて、踵を横ざまに踏みながら、中折の庇から、對手の眉間を透かし視つゝ、

「私に用か。」

「一寸……お話しが……あります」

て……と落ちていたのか、息せはしいのか、冬の夜ふけをなまぬるい。

「用事は何です。」

はじめ、靄の中を、此の三人が来て通りすがつた時、長いのと短いのと、野墓に朽ちた塔婆か二本、根本にすがれた尾花の白い穂を縋らせたまゝ、土ながら、凧の餘波に、ふは／＼吹き送られて来たかと思つた。

漸つと、其の（思つた）が消えて、まぎ／＼と慥うしてものを言交はせば、武藏野の丘の横穴めいた、山の手場末の寂びた町を、搜り／＼稼いで歩くのが、誘ひ合はせて、年を越す蚊のやうに、細い笛の音で、やがて木賃宿の行燈の中へ消えるのであらうと、合點して、坂上も梢もの言ひが穩かに成つたのである。

按摩は其仰向いて打傾いた、耳の痒いのを搔きさうな手つきで、右手に持添へた杖の尖を、軽く、コト／＼コト／＼と弾きながら、

「用と云うて、別に、此と云うてありませぬ。あ

りませぬ、けれども、お前様今から、何處へ行かれ
ます。何處へ、何處へ、何處へ？」・・・と些
と嘲けるやうに、小鼻で調子を取った聞き方を
する。

「構ひなさんな。」

無理な首尾の、婦に忍ぶ夜であつた・・・坂
上は憤然として、

「何處へつても可いではないか。」

「可うない、其が可うない、お前様、」と押附
けに言つた聲に、振切つては衝と足の出ぬ力が籠る。

「何故悪いんだね。」

と、却つて坂下へ小戻りにつか／＼と近づいたが、
餘り傍へ寄ると、霧が、ねば／＼として顔へ着き
さうで、不氣味で控へた。

「もう遅い！」

と急に幅のある強い聲。按摩は其の時、がつくり
と差俯向く。

立ち窶んだ體だつた、長頭の先達盲人は、此の時、
のろりと身動きして、横に崖の方へ顔を向けた。

次つぎの婦をんなは、腰こしから其その影かげを地つちへ吸すひこ込まれさうに、
悄しんぼり乎こしと腰こしをなやして踞しゃがむ・・・・・鬢びんのはづれへ、
ひよろりと杖つゑの尖さきが抽ぬけて青あをい。

三人にんが根ねをおろしたらしく見て取とると、坂さか上かみも、
急きふには踏ふみ出だせさうもなく、足あしが地ちに附くついたが、前ま
途きを急いそぐ胸むねは、はツノと、毒どく氣きを掴つかんで口くちから吹ふき
込まれさうに躍をどつて、血ちを動うごかしては、ぐつと膨ふくれ、
肉にくをわなゝかしては、げつそり挫つこげる。

坂さかの其その兩りやう方ほうは、見み上あげて峰みねの如ごとき高たか臺だいのなだれ
た崖がけで、・・・・・時ときに長なが頭あたまが面おもてを向むけた方ほうは、空そら
に一二けん軒げん、長なが屋や立だてが恰あたかも峠たうげ茶ちや屋やと云いふ形かたちに、霜しもよ、
と靄もやのたゝまり積つんだ、枯かれ草くさの上うへに、灯ひの影かげもなく
鎖くわさるゝ。

で、此このものどもの寄よつた方ほうは、木きの根ねぐるみ地ち
壓さへの杭くひも露あは顯はに、泥どろの崩くづれた切き立りたてゝ、上うへには樹こた
立ちが参すく差くと骨ほねを繋つなぐ。其その枝えだの所しょ々々、濁にごつた月つき影かげの
やうな可い厭やな色いろの靄もやが搦からんで、星ほしもない・・・・・
山やま深ふかく谷たに川がはの流ながれに望のぞんだ思おもひの、暗やみ夜みの四よつ谷やの谷たにの

底、時刻は丁ど一時頃。

激しく動くは胸ばかり……すん／＼と陰氣
な空から、身體を壓附けられるやうで、

「遅いのが、何で悪い。」
「ともものいひも重く成る。」

「然う言はれる、申される……」
と杖を持った手の甲を、丁と敲き、

「如何にも、もし、それが悪い……」
「行つては不可いと云ふのかね。」と、心が

りな今夜の逢ふ瀬の、辻占にもと裏問へば……
「悪いと云うたりとて、お前様氣一つで行かるれ
ば、それまでの事ではあれど、先づお留め申したい。

これは、私一人か……其處に居る人も。」

と云つて、杖をまつすぐに持直すと、むかうで長
頭が、一つ幽な咳。

「行くなつたつて、行かなけりや成らない所だつたら何うします。」

と坂上の呼吸はあせつた……

「親が大病だか、友だちが急病だか、知れたもんですか。……君たちのやうに言つちや、何か、然も怪しい所へでも出掛けるやうだね。」

「へへへ、」

と彼の尖に頬をすりつける如く傾がつて、可厭に笑ひ、

「其が分ればこそ申すのなり、あの人も言へと言ひます……當てますか、私が……知つても大事な。朋けて爾々とお言ひなされ。お前様は婦に逢ひに行く、」

「……」

「な、然も、先方は、義理、首尾で、差當つては間の悪い處を、お前様が突詰めて、斷つて、垣も塀も、押倒し突破る……其の力で、胸を搔毘

るやうにあせるから、婦も切つて、身にも生命にも代へて逢はうと云ふ。其へ行く……お前様、其の途中でありません。通りがよりから、扣逢うて、恚うやつて拵違うたまでの躰看で、よう知れました。とぼ／＼した、上の空なので丁と分る……

霧もかゝり、霜もおりる……月も曇れば星も暗し、此の大空にも迷ひはある。迷ひも、其は穩なれども、胸の塞り呼吸が閉る、もやくやなあとの、電、はたゝがみを御覽ぜい。

人間の思ひ、何事も不思議はない。

私が心に思較べた……身に引較べればこそ、

此の掌を……

と云ふ、己が面へ、掌を蓋する如くに、

「……掌を見るとやら申す通り、見えぬ目にも知れました。」

あとの二人とも、此の時言合はせた體に、上と下で、衣もの、襲襪まで、頷いたのが臍に分つた。

坂上は、氣拔けのした状に、大息を吻と吐いて、

「辻で賣卜をする人たちが。私も氣が急いだので、何か失禮を言つたかも知れない……」

先方は足袋跣足で、或家を出て、――些と遠いが、これから行く所に、森のある中に隠れて待つた切、一人で身動きも出来ないで居るんです。

其の事は、私が今まで居た所へ、當人から懸けた、符牒ばかりの電話で知れて、實際、氣も顛倒して急ぐんです。行かないで何うしますか、行つては悪いんですか。」

「われら考へたも其の通り……いや、男らしく、よう申されました。さて、いづれもお最惜しいが、あゝ、危い事かな。」

と杖を引緊めるやうに、胸へ取つて兩手をかけた。瘦按摩は熟と案じて、

「先づお聞き申すが、唯今、此の坂の此の、われらが片寄つて路傍に立ちました……此の崖下に、づら／＼となぞへに並びました瓦斯燈は、幾基が所燈が點いて、幾基が所消えて居ります。一寸、御覽ぜ、一寸御覽ぜ。」

と言ひ／＼、がく／＼と頤を掉つて首を垂れる。

言いひに引ひ向むけられたやうに、三人にんの並ならんだ背後うしろを拾ひろつて、坂下さかしたから、上うへの町まちへ、トずらりと視みると・・・坂上さかがみは今夜こんやはじめて此この路みちを通とほるのではない。・・・片側かたがはへ並ならべて崖がけ添そひに、凡およそ一間けんおきくらゐに、間なかを籠こめて、一ひ二ふ三み堂だうと云いふ、界かい隈わいの活くわつ動どう寫しや真しんの手てで建たてた、道だう路ろ安あん全ぜんの瓦が斯す燈とうがすく／＼ある。

しろ／＼と霜柱しもはしらのやうに冷つめたく並ならんで、硝子火屋ガラスほやは、崖がけの巖穴いはあなに一ひとツ一ひとツ窓まどを開あけた風情ふぜいに見みえて、ばつたり、燈あかりが消きえたあとを、目めの届とどく、どれも是これも、靄もやを嚙かんで、吸すひ溜ため、吸すひ溜ため、透間すきまを覗のぞいて切きれ／＼に灰色はいいろの息いきを吹ふき出す。

かと思おもへば、目めの前まへに近ちかいのは、あらう事ことか、鬼おにの首くびを古綿ふるわたで面形めんがたに取とつた形かたちに、靄もやがむら／＼と瓦が斯す燈とうの其その消きえたあとに蟠わたかまつて、怪あやしく土蜘蛛つちぐもの形かたちを顯あらはし、同おなじ透間すきまから吹ふく息いきも、これは可おそ恐ろしい絲いとを手た繰ぐつて、天そらへ投なげ掛かけ、地ちに敷しき展のべ、宙ちゆうに綾取あやとる。や、然さう思おもへば、靄もやのねば／＼は、這こ個この振舞ふるまひ

か。

四

「大抵、皆消えて居ります筈で。」

と按摩は、坂上が然うして、きよろ／＼と瓦斯燈を二す内に、先んじて又云つた。

「すつかり消えて居る。あゝ、」と尚ほ一倍、夜の更けたのが身に染みた。

「な、消えて居りませう。．．．．．けれど、お前様から、坂の上の方へ算へまして、其の何臺目かの「瓦斯が一つ、まだ燈が點いて居らねばなりません。．．．．．見えますか。」

「見える。．．．．．」
と答へた、如何にも一臺、薄ぼんやりと、燈が亂れて、霧へ流れさうに點いて居る。

「しかし、何本めだか一寸分らない。」
「餘り違い所ではありませぬ。人通りのない、故道松並木の五位鷺は、人の居處から五本目の枝に留ります、道中定り。．．．．．其の燈の消残りましたのは、お前様から、上へ五本目と存じます。」

私が間違つた事を言ひますれば、其處に居ます師匠、沙汰をします筈。點つて立つて居ります上は、決して相違ないと存じます。數を取つて御覽ぜ、御覽ぜ・・・一つ、と杖の尖をカタ／＼と二つ鳴らす。

「一い・・・」

「二ツ、」と三ツ、杖の尖をコト／＼コト。

「三い・・・四う・・・確に五本

目・・・」

「でありますうな。」

「何うしたと云ふんです。」

「お前様、此の暗夜に、われらの形、崖の様子、消えた瓦斯燈の見えますのも、皆其の一つの影なので。然もない事には、鼻を撮まれたとて分りませぬが。」

「成程、覺束ない、ものゝ形も、唯一ツ其の影なのである・・・て心附くと、便りない色ながら、其の力には、揃つて消えた街燈が、時々ぎら

／＼と光りさへする。―― 靄が息を吐いて瞬く中に、―― 坂上の姿もふら／＼として、

「一體、其がへどうしたんです。」何

「然れば……其の五基目に一ツ残りました灯の下に、何か見えはいたしませぬか。」

「何が、」

と云ふのも聲が震ふ、坂上は又悚然とした。

「何か、居はいたしませぬか。」

「何にも、何にも居らん。」

「居りませぬか。」

「居ない。」

「居ないが定に成りませぬ。お前様が其處までお運びなされますれば、必ず出ます。……それ故に、お留め申すのであります、まあ、お聞きなさりまし。」

と捻向いて、瘦按摩は腰を屈めながら、丁ど足許に一基あつた……瓦斯燈の根を、其處に轉がつた、ごろた石なりにカチカチと杖で鳴らした。が音も響かず、靄に沈む。

「先づ・・・最う一ツ念のために申さう
に・・・われらが居ります此なる瓦斯燈、唯た
今、お前様を呼留めましたなり、一步とて後へも前
へも動きませぬ・・・此は坂下からはじめまし
て、立ちました瓦斯燈の、十九基めに相違ありませ
ぬ。

間違へば、師匠沙汰をなされます。

さて、三年前、・・・日は違ひます。なれど
も、同じ此の霸月の夜さり、丁ど同じ今の時刻、私
にもお前様と同じ事がありました。・・・

其の頃は、決して其の、恁やうな盲目ではありま
せなんだ。」

と云ふ、まともに坂上に對して、向直つたけれど
も、俯向いたなりで顔は上げぬ。

「よう似た、お前様と同じ事で、然る婦にあひゞ
きに參るので、此處を、此の坂を、矢張り、向つて
下から、うか／＼と上りかけたのであります。

時に擦違つたものが、これだけは、些と様子が違

ひまして、按摩一人だけが見えました。」
「其の時、件の、長頭は、くると眞背後にむかう
を向いた、歩行出すか、と思ふと・・・・熟と其
のまゝ。」

「婦は、と見ると、其は、黥間の話を聞くらしく、
 踞んだなりに、くるりと此方に向直つた、帯も膝も、
 くな／＼と畳まれさうなが、咽喉のあたりは白かつ
 た。」

按摩の聲は判然して、

「で、其で矢張り、お前様に私がしましたやうに、
 背後から呼留めまして、瓦斯の五基目も、足もとの
 十九の數も、お前様に今われらが言うた通りの事を
 申します。」

私はこゝで、其の通りを、最う一度申しますばか
 りの事。

何で、約束した其の婦に逢ひに行つて成らぬのか
 と——今のお前様の通りを、又其の時私が尋ね
 ますと、彼の盲人が申すには、「

其の盲人は、こゝに先達の其の長頭である事は、
 自から坂上の胸に響く。」

「上へ五本めの、一つ消え残つた瓦斯燈の所に、怪しいものゝ姿が見える……其は、凡て人間の影を捉る、影を掴む、影法師を啖ふ魔ものぢや。彼めに影を吸はるれば、人間は形瘦せ、嘗めらるれば氣衰へ、蹂躪らるれば身を悩み、吹消さるゝと命が失せる。」

凡そ、月と日とゝもに、影法師のある所、件の魔もの附絡はずと云ふ事なうて、且つ吸ひ、且つ嘗め、蹂躪る。が、いづれ其の人の生命に及ぶには間があらう。其もつて大事ぢやに、可恐しいは、今あるやうな燈の場合。一口くわつと遣つて、」
と云つた。按摩の唇は尖つたな！

「立所に影を啖ふ、啖はるれば、それまでぢや、生命にも及びかねぬ。必ず此の坂を通らるゝ」

な……
と恚う言ひます。

私も血氣で、何を言ふ。第一ち、其の魔ものとは

どんなものか、と突懸つて訊きますと、其の盲人二
ヤリともせず、眞實な顔をしまして、然れば、然れ
ば先づ、守宮が冠を被つたやうな、白犬が駒伸びし
て、頭に山伏の兜巾を頂いたやうなものぢや、と性
の知れぬ事を言ふ。

いや、聞くよりは見るが疾い。さあ、生命を取ら
れて遣らう、と元來、あたまから眞とは思ひませぬ
なり。づか／＼、其の、．．．其處の其の五基
めの瓦斯燈の處まで小砂利を蹴つて参りますと、道
理な事、何の仔細もありません。

處に、右の盲人、カツ／＼と杖を鳴らして、匆上
つて、飛んで参り、これは無體な事をなされ
る。．．．強い元氣ぢや。私が言うて聞かす事
を眞とは思はぬ汝に、言託けるのは無駄ぢやらうが、
ありやうは、右の魔ものは、さしあたり汝の影を、
掴まうとするではない。

今夜．．．汝が逢ひに行く．．．其の婦
の影を捉らうと、豫てつけ狙うて居るによつて、嚴

い用心ようじん、深いふか謹愼つししみをしますやう、
心こころづけがしたかつたのぢや。 汝こなたを通じて、其その

と恚かう又また言いふのでありました。
「

「まざ／＼と謔言吐く……私の婦知つたりや、と問ひますと、其を知らいで何をする……今日も晩方、私が相長屋の女房が見て来て話した。谷町の湯屋で逢うたげな。……よう湯の煙で溶けなんだ、白雪を撫でゝふつくりした、其は、其は、綺麗な膚を緋で緊めて、淡い淺黄の紐で結へた、乳の下する／＼、迂るやうな長橋袷。小春時の一枚小袖、藍と紺の小辨慶、黒締子の帯に、又緋の扱帯……鬚に水色の絞りの手柄。艶の雫のしたゝる鬢に、ほんのりとした耳のあたり、頸許の美しさ。婦同士も見惚れたげで、前へ廻り、背後で視め、姿見に透かして、裸身のまゝ、つけまはいて、黒子が一つ、左の乳の、白いつけ際に、ほつりとある事まで、よう知つたと云ふ話。

何と、此の婦に相違あるまい、汝が逢ひに行く其の婦は……と又其の盲人が云ふのであります。

聞くうちに、坂上は、ふる／＼と身震ひした。其は、其處に、此の話をする按摩の背後に跪い居て、折から面を背けた婦が、衣服も、帯も、まさしく、歴然と、其の言葉通りに目に映つたゝめばかりではない。

足袋跣足で出たと云ふ、今夜は、もしや、あの友染に・・・あの裾模様、と思ふけれども、不
見馴れて氣に染みついた、其の黒縹子に、小辨慶。
坂上は血の冷えるあとを赫と成る。

「何うでありませう。お前様。此から逢ひにおいでなさらうと云ふ、其の婦の方は、裾模様に、錦の帯、緋縮緬の蹴出しでも。・・・其の黒縹子に、小辨慶の藍と紺、膚の白さも可いとして、乳房の黒子まで言ひ當てられました、私が其の時の心持、憚りながら御推量下さりまし。

こゝな四ツ谷の谷底に、酷い事、帯紐取つて、あか裸で倒されてゞも居りますのが、目に見えるやうに思はれました。

で、右の其の盲人は、例の魔ものは、其の婦の影を、嘗めう、吸はう、捉へよう、蹂躪らう、取啖はうとつけ廻す。――此の儀を汝から託けて、氣を注げるやう言ひなさい、と申したのを、よくも聞かずに、黒雲を捲いて、飛んで行き、電のやうに、鐵の門、石の唐戸にも、遮らせず、眞赤な胸の炎で包んで、弱い婦に逢ひました。

影を取る、影を吸ふ、影を嘗める、魔ものに逢つた。此の坂しか／＼の瓦斯燈のあかりで見えて来た。……

婦の家は、つい此の居まはりでありました。――

夜も晝も附廻すぞ、それ、影が薄いわ、用心せい、とお前様。

可哀氣に、苦勞で氣やみに煩つて、帝をしめてもゆるむほど、細々と成つて居るものを、鐵槌で打つやうにくまで申しましたわ。

他人に、膚を見せたと思ふ妬みから、―― 婦が
膝に突俯して、震へる聲の下で、途中、どんなもの
に逢つて誰に聞いた話だ、と右の影を捉る魔につい
て尋ねました時、―― おのれ、胸に問へ！ なぞ
と云うて、盲人から聞いた事は言はずに了つたので
ありました。

此が飛んでもない心得違ひ。其の盲人こそ、其の
婦に思ひを懸けて、影のやうに附絡うて、それこそ、
婦の家の居まはりの瓦斯燈のあかりで見れば、守宮
か、と思ふ形體で、裏板塀、木戸、垣根に、いつも
目を赤く、面を蒼く、唇を白く附着いて、出入りを
附狙つて居たとの事。

はじめから、威したものが盲人と知れば、婦も
然までは呪詛はれずに済んだのでありませう。――

七

「今度……其の次……段々に婦に逢ふ事が少くなりました。」

兎角むかうで、私を避けるやうにするのでありません。

……殺して死なう、と逆上するうち、段々委しく聞きますと、其の婦が、不思議に人に逢ふのを賺ふ。妙に姿を隠したがるのは、此の、私ばかりには限らぬ様子。

終には猪又が化けた、妾のやうに、日の目を厭うて、夜も晝も、戸障子兩戸を閉めた上を、二重三重に屏風で圍うて、一室どころに閉籠った切、と言ひます……

漸との思ひ、念力で、其の婦を見ました時は、絹頼も、むれて、ほろ／＼と切れて消えさうに、なよ／＼として、唯うつむいて居たのであります。

顔を上げさした……ト目が、潰れました。

へい、いえ、其の婦の兩眼で。

聞きますると、私に、件の影を捉る魔ものゝ話を
聞いてからは、瞬く間さへ、瞳に着いて、我と我が
影が目前を離れぬ。

臺所を出れば引窓から、縁に立てば沓脱へ、見返
れば障子へ、壁へ、屏風へかけて映ります。
映ると其の影を、魔が来て、吸ひさうで、嘗めさ
うで、踏みさうで、揉みさうで、絡みさうで、
寝さうで成らぬ。

月の影、日の影、燈の影、雪、花の朧々のあかり
にも、見て影のない隙はなし・・・影あれば其
の不気味さ、可厭さ、可恐しさ、可忌しさに堪かね
る。

所詮が嵩じて、眞暗がり。我が掌は見えいでも、
歴々と、影は映る、燈を消しても同じ事だ。

次第に、床の間の柱、天井裏、鴨居、障子の棧、

疊たぐみのへり。場所ばしよ、所ところを變かへつゝ、彼あの守宮やもりの形かたちで、
天窓あたまにすぼりと何か被かつた、あだ白しろい、胴どうの長ながい、
四足よつあしで畝うねるものが、ぴつたりと附くつ着ついたり、ことり
と圓まるくなつたり、長々なが／＼と這はふのが見みえたり・・・
やがて、闇やみの中なか、枕まくらの下したにも居あるやうに成なりました。

見みる毎たびに、あつと聲こゑを上げ、追おへば、其その疾はやい
事こと、ちよろ／＼と走はしつて消きえて、すぐ、のろりと
顯あいひはれる。

見みまい、見みまいの氣きが逆うはつて、ものゝ見みえるは
目めのあるため、と何なんとか申ます藥くすりを、枕まくらをかいもの、
仰あむむ向けに、髪かみを縛しばつた目めの中なかへ點した滴ゝらして、其その兩りやう
眼がんを、盲めくらにした、と云いふのであります。

心こころも暗夜やみの手てを取とり合あつて、爾時そのときはじめて、影かげを捉と
る魔まものゝ話はなしは、坂さかの途とちう中で、一人ひとりの盲めくら人に聞きかさ
れた事ことを申まして、其その脊せい恰かつ好かう、年としごろを言いひますと、
婦をんなは、はつと、はじめて目めの覺さめたやうに成なつて、
さめ／＼と泣なきだだしました。

思ひの叶はぬ意趣返しに、何と！ 右の其の横戀
慕の盲人に、呪詛はれたに相違ありませぬ。

頬の肉を引搦んで、口惜涙、無念の涙、慙愧の涙
も詮ずれば、たゞ／＼最惜しさの涙の果は、おなじ
思ひを一所にしようとして、私これ又此の通り、兩眼を
我と我手に、．．．これは針でツブリと突いた
のであります。

三世、一娑婆、因果と約束が繋つたと、いづれも
發起仕り、懺悔をいたし、五欲を離れて、唯今では、
其なる盲人ともるともに、三人一所に、杖を引連れ
て、晝は面が恥かしい、夜とあれば通ります．．．
．．．

路すがら行逢ひました。

御迷惑か存ぜぬが、靄の袖の擦合うた御縁とて、
びつたり胸に當る事がありましたにより、お心着け
申上げます．．．お聞入れ、お取棄て、ともお
心次第。

此の上は、さて、何も存ぜぬ。然やうなれば、お暇を申受けます。」

言の下より、其處に、話の途中から、さめ／＼と泣いて居た婦は、悄然として、しかも、すらりと立つた。

とぼ／＼とした後姿で、長頭から三つの姿、消えたる瓦斯に、幻や、杖の影。

婦が、白い優しい片手で立つ時、眼を拭いた布が姿を偲ぶ……其の紅絹ばかり、ちら／＼と……蝶のやうに靄を縫ひ……

【完】